

～保坂リエ 第四句集 『七十路の果て』他より

- 1) 鶺鴒や罪なき石を叩きをり
- 2) 春の服年を盗まれたくて買ふ
- 3) 春浅し扱ひにくきオブラート

リエさんは極めて実直の方とお見受けする。
嘗て千葉県婦人警官に奉職、からも納得できる。
名結社「くるみ」を興されて二十四年。堂々たる女流俳人。
お人柄から《滑稽俳句》には無縁と思われるが、
此の様なお方の作品群から滑稽作を抜くのも興味が尽きない。

1) 鶺鴒や罪なき石を叩きをり

何の罪もない川原の石を盛んに叩く「石叩き」の姿にはほのぼのとした滑稽感が湧く。
また、われわれ人間に子孫繁栄の根本動作を教えてくれたのは
他ならず「鶺鴒」と言う。併せて考えると一層、作品の奥が深くなる。

2) 春の服年を盗まれたくて買ふ

「盗む」と言う反社会的な言葉をこれほど巧みに遣った例は珍しい。
殊に歳を拘る妙齢の女性から発せられた上品な「滑稽」
これこそ八木会長の称える「俳句」である。

3) 春浅し扱ひにくきオブラート

齡と共に服用する薬が多くなる。

中で苦手は粉末薬で、オブラートに頼らざるを得ない。

昔ならどの家庭でも常備したものだが今では売っているのが不思議なほど存在感が薄い。それ自体滑稽だが「扱ひにくき」とは蓋し名言である。